

家族で役割分担し、大規模レンコン経営を実現 ～レンコン産地を維持する担い手を目指して～

愛西市 株式会社山三レンコン（山田美治男さん）
野菜（レンコン）

【平成31年1月30日掲載】

愛西市でレンコン専作経営を営む山田美治男さんをご紹介します。山田さんの経営は、レンコン栽培では国内トップレベルの約20haであり、市場の期待に応えることで、安定した経営を実現しています。

株式会社山三レンコンの概要・あゆみ

山田さんは、市場に就職して、約10年間務めた後、昭和61年にレンコン農家であった実家を継ぎました。就農時は、2.5haの面積からスタートしました。品質の高さや安定した出荷が、市場で評価され「もっと売ってほしい。規模を拡大してほしい」と強く要望されたため、平成10年には5ha、平成15年には10haに拡大しました。平成20年ごろから3人の息子さん達が就農して人手が増えたことと、地域の農家から耕作を委託されることが多くなったことを背景に、現在では、レンコン栽培では全国でもトップレベルの約20haまで拡大しました。

平成28年に法人化し、社長の美治男さんと息子3人とそれぞれの妻を含めた社員10名と4～5名のパート、外国人技能実習生5名の体制としています。



長男の真弘さん（左）と美治男さん（右）

市場の要望に応えた生産・出荷

山田さんは、10年間の市場勤務の経験から、市場の要望に応えることの重要性を認識しており、レンコン生産では、品種構成の選定と安定出荷に気を配っています。

品種は、取引している市場の求める「ロータス」を中心に「備中」等を栽培しています。レンコンの収穫方法は主に2種類あり、水圧を利用して省力的に収穫する水掘りと、鍬で掘り出すため手間のかかる土掘り（鍬掘り）があり、それぞれに向く品種があります。「ロータス」は土掘りに向く品種であるため収穫に手間がかかりますが、（株）山三レンコンでは、市場の要望に応じて「ロータス」を生産しています。



収穫した「ロータス」の出荷調整作業

また、市場の信頼を得るために、安定出荷に取り組んでいます。土壌病害を発生させないために、長年、ワラと鶏糞たい肥を投入して土づくりを行い、安定した収量を確保しています。さらに、自社の冷蔵庫を活用しながら、柔軟に出荷量を調整できる体制を整えることで、これまでに欠品をせず出荷をしています。その結果、販売価格が安定しています。

有機栽培の取組

出荷している市場とのやりとりから、消費者の安全・安心への関心の高まりを聞き、何か市場や消費者に対して証明できるものが欲しいと考え、有機JAS認証を平成14年に取得しました。

以前から力を入れていた土づくりに加え、有機JAS認証取得の際には、肥料も見直す必要があったため肥料会社と相談し、有機質中心の専用の配合を作成してもらい、使用しています。

現在は生活協同組合に出荷している有機栽培のレンコンには、リピーターがついており、新たな強みとなる手ごたえを感じています。現在の2.5haの有機栽培を、今後は5haまで増やす予定です。



有機JAS認証のシール

産地の重要性と担い手の育成

山田さんは、現在の市場や消費者は「愛西市にレンコン産地がある」と認識しており、生産や販売を行いやすいと言います。産地の存在を心強く感じ、産地あつての自身の経営だと考えているため、愛西市のレンコン産地を守っていきたくと考えています。そのため、地域の担い手の育成にも力を入れてきました。

(株)山三レンコンで雇用した従業員や研修生に、段階を追って作業を任せながら、栽培方法や経営主としての考え方などを惜しみなく教えています。その中から、今まで2名が独立し、同じ地域でレンコン農家として一人立ちしています。



愛西市内に広がるレンコン畑

次世代への引き継ぎ

5年ほど前から、息子さんへの経営移譲を考えており、長男は次期社長、次男は生産現場の担当、三男は出荷調整や経理担当としての役割を与え、後継者の育成を行ってきました。現在では、市場や業者とのやりとりをはじめ、生産や出荷調整作業の多くを任せられる状況になっており、息子さん達の成長ぶりに満足している様子でした。山田さんは「日本一のレンコン農家を目指してやってきた。これからは息子たちの時代になる。生産技術や販売だけでなく、より良い経営を目指す姿勢も引き継ぎたい」と力強く語っていました。

執筆：農業経営課

取材協力：海部農林水産事務所農業改良普及課